

Cover History

— 表紙写真由来 —

大地を潤す「東方大丸太鼓橋」

—宮崎県小林市—

宮崎県農政水産部農村整備課 田口 保

1. はじめに

「東方大丸太鼓橋」(表紙写真)のある小林市は宮崎県の南西部に位置し(図-1)、市の南西部には霧島連山(写真-1)が連なり、平均降水量2,600mm、平均気温16℃で、昼夜、夏冬の気温差が大きく、温暖な内陸性気候である。

畜産を中心に冷涼な自然条件を生かした野菜や花きの生産をはじめ、稲作や果樹など多彩な農業が展開されている県内有数の農業地帯である。

また、農用地は、田2,251ha、畑・樹園地3,691haで、県内で4番目に田の多い地域となっている。



図-1 小林市の位置



写真-1 霧島連山

2. 大丸開田と用水路の建設

小林市は、廃藩置県まで薩摩藩に属しており未開発の土地が多くあった。藩は、18世紀後半から村の再建や新田開発のため人配と呼ばれる農民の移住政策を行い、人口過剰な西目(薩摩半島郡の諸郷)から広大な未開発の土地があった東目と呼ばれた大隅半島、日向国諸県郡一帯へ農民の強制移住策をとっていた。

この人配政策により安永6(1777)年から同9(1780)年までの間に、小林郷に100人、都城領に83人、高原郷に55人、高城郷に46人、山之口郷に23人が移住した。

東目地方には、開田の適地も広くあったと思われ、享保期(1716~1736年)以降は小林郷でも多くの開

田事業が行われた。開田には、農民の私営で行うもの、藩営によって行うもの、商人が私財を投じて行うものなどがあったが、小林郷の大丸地区に開かれた大丸開田は、薩摩の豪商森山新蔵が自己資金をもって開発したものである。

森山は、天保11(1840)年2月に、浜之瀬川上流の西岸に取水口(写真-2)を設けて用水路を開削し、大丸地区一帯にまず17町歩(約16.8ha)の水田を開いた。浜之瀬川の西岸から東岸へは木樋を使って用水を通水していたが、木樋は耐久性が弱く通水量にも限界があること、川幅が広く河床からの高さも高いこともあり洪水の度に補修が必要で、さまざまな技術的困難があった。

また、当時人馬の通行も今の太鼓橋上流のつり橋を使用していたが、危険を伴うものであったことから、森山は私財を投じて石橋を架けることを決意し、弘化4(1847)年、現在の石造りのアーチ橋「東方大丸太鼓橋」を完成させた。この架橋によって、大丸新田の用水と交通の便は画期的に良くなり、開田面積も30町歩に拡大した。

この石橋は、現在、県内に残る最古の通水橋として平成15(2003)年に県指定有形文化財に指定された(写真-3)。

森山は、この功によって士分に取り立てられ、鹿児島城下の天文館通りに居宅を構えたといわれる。森山は幕末から明治維新期に活躍した大久保利通や西郷隆盛らと関係が深く、活動資金の援助者であったとされている。文久2(1862)年に京都伏見で起こった寺田



写真-2 浜之瀬川の取水口

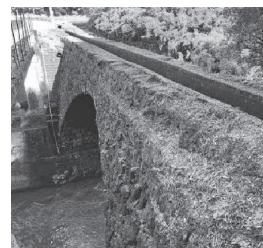
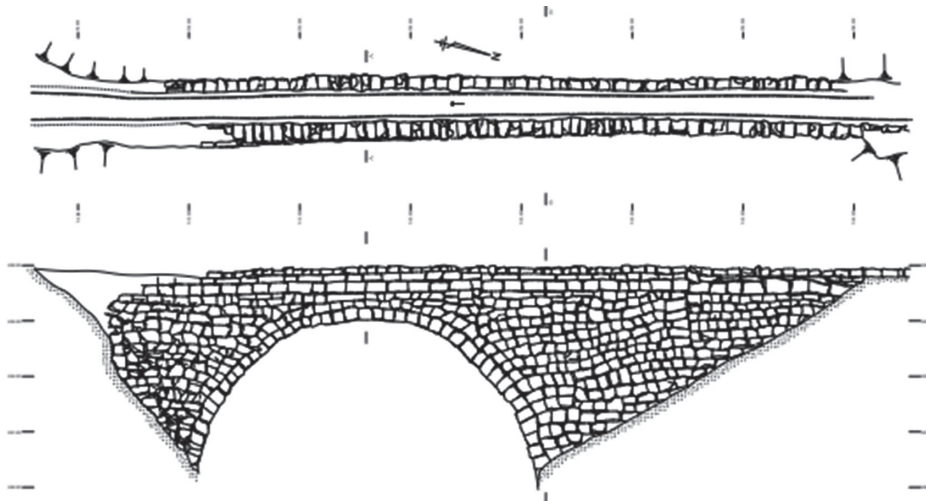
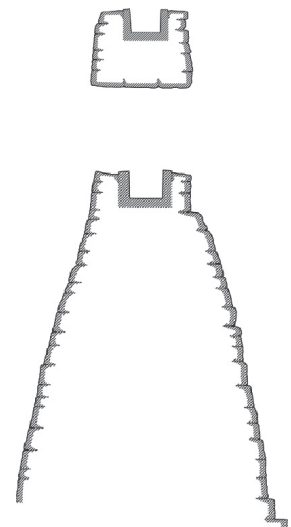


写真-3 石橋の上部



出典：小林市社会教育課

図-2 東方大丸太鼓橋の正面図と平面図（上）



出典：小林市社会教育課

図-3 東方大丸太鼓橋の横断面

屋事件には、息子の新左衛門が連座して重傷を負い、翌日、藩邸で自刃を命じられている。そのため、父新蔵も遠島の処罰を受けて山川港に送られたが、船中で自決したといわれている。

3. 石橋を造った技術者たち

(1) 石橋の構造 人・馬しかない時代に、これまで大きい石橋を造るには相当高い石橋造りの技術と多くの労力が必要であったに違いない。東方大丸太鼓橋の建設に携わった石工や大工、人夫等に関する詳細な文献は残っていないが、筆者の推測も含め以下に紹介したい。

東方大丸太鼓橋は、浜之瀬川にかかる石造りのアーチ橋で、石橋の長さは31.5m、幅3.0m、川底から橋の上面までの高さ14.0m、径間15.3mで、水路部分は切石積みで全体的には不整形石の乱積みで造られており、石橋の横断面は上部から下部にかけて広がる台形状をなしている（図-2, 3, 写真-4, 5）。橋の材料となった石は架橋場所すぐ北側にある石切場で採取されており、石切場の岩壁面には「弘化二」と彫られた文字が今も残っている。

(2) 石橋を造った技術者たち 江戸時代に石造りのアーチ橋の架橋技術が日本に伝わり、それまで建設費用の面からも木の橋が中心であったものが九州では多くの石橋が造られている。九州最古の石橋は、寛永11（1634）年長崎県の中島川にかけられた「眼鏡橋」で、中国出身の僧（如定）の指導により造られ、以後、九州全域に広がったといわれている。また、長崎出島の役人だった藤原林七が長崎に来ていたオランダ人から眼鏡橋の原理と円周率による計算方法を学び、肥後の種山村（現在の熊本県八代市）に移住し、農業のかたわらアーチ橋の架橋技術を完成させ弟子や息子達に



写真-4 緻密に組まれた切石



写真-5 アーチの要石

その知識と技術を伝授し、石橋を建設する「種山石工集団」となったといわれている。

岩永三五郎は、八代郡野津手永西野村の石工宇七の次男として生まれ、藤原からアーチ橋の理論と技術を学び「種山石工集団」の中心的人物であった。

この肥後の岩永が薩摩藩から招かれ、鹿児島市の甲突川五大石橋を架橋（1845～1849年）している。これらは4連から5連になるアーチ橋で、その石橋としての技術力の高さがうかがわれる。

また、熊本県下益城郡美里町にある水路橋として架橋された雄亀滝橋は、文化14（1817）年に岩永が架けた単一アーチ橋の石橋とされており、全長15.5m、幅3.6m、高さ7.4m、径間11.8m、で小林市の東方大丸太鼓橋とその姿・形・大きさともうり二つである。

石橋の建設には、その材料となる石を切削・加工・石組を行う石工、加工した石材をアーチ状に組むための支保工を組み立てる大工、石材を運搬する運搬職人などの種々の技術が必要で、一朝一夕に習得できるものではない。薩摩藩とも繋がりがあり、石橋の建設技術を確立し九州内で多くの石橋を架橋している「種山石工集団」の技術者達が小林市の東方大丸太鼓橋の架

橋にも携わっていたのではないかと筆者は推測している。

薩摩の豪商であった森山と小林市との関わりや石橋を架けるための石工集団との交渉をどうとりまとめたかについて、今となっては知る由もないが、森山の人知と強い意志なくしては成しえなかった開田事業であった。

4. 田の神様（たのかんさあ）のはなし

旧薩摩藩領域の村々には、田の見える高台や田のかたわら、あるいは集落の脇に、高さ50~100 cmほどの丸彫り・浮き彫りの石像がある。これが田の神石像である。地元では「田の神様」と呼ばれており、今でも人々に親しまれている（写真-6）。

これらは新田開発やその土地の生産力向上、五穀豊穡を願ってつくられてきた。たのかんさあにはさまざまな形が見られ、仏像型、僧型、旅僧型、神像型、田の神舞型に分類することができる。これらは仏像型系



写真-6 大丸開田に鎮座する「たのかんさあ」

統と神像型系統に分けられるが、小林市や都城市では神像型のものが多く見られることから、この地域が神像型の発祥の地であることを示している。これは江戸時代の享保元（1716）年に霧島山の新燃岳が大噴火を起こして、神社や家屋、農作物等に大きな被害をもたらしたことから、山の神の怒りを鎮める願いを込めてこのような姿になったといわれている。

5. おわりに

造成から174年間、地域農業の発展の礎となった「東方大丸太鼓橋」であるが、もうしばらくすると農業用水路としての役割を終えることになっている。それは、この地域を潤す農業用水が新たな水源に切り替わり、パイプラインにより配水するための整備が進められているからである。

これまで永きにわたり地域の農業者が維持管理を行い、地域の水田を潤してきた農業用水路も廃止されることになるが、今後は「東方大丸太鼓橋」を地域に残る重要な歴史建造物として、先人の労苦を後世にどう伝え残していくのか、を地域住民をはじめ関係機関が一体となって話し合いが始まったところである。

参 考 文 献

- 1) 甲斐亮典：図説 西諸・北諸の歴史，郷土出版社，p.120, 158 (2007)
- 2) 小林市史編纂委員会：小林市史 第1巻，図書刊行会，p.561 (1987)
- 3) 田中清章：九州の石の文化，Civil Engineering Consultant 254, pp.36~39 (2012)